

まえがき

徳島大学総合科学部社会学研究室
准教授 榎田美雄

今回のディスカッションペーパー第5号『エスノメソドロジーによる探求－ALS、写真、鍼灸－』は、榎田美雄ほか11名（計12名）の共著として刊行される。この著作物は、榎田が平成20年度の奈良女子大学大学院人間文化研究科での集中講義「実践スキルゼミナール」（2単位）を担当したことをきっかけとして作成されたものであり、内容的にはゼミ論集としての性格を持つものである。

ゼミは2008年12月20日・21日および2009年2月15日・16日の4日間にわたって開催された。授業用のメーリングリストが作成され、期間の全域にわたって活動がなされたことを付記しておきたい。

授業の具体的内容は以下の通りであった。まず、エスノメソドロジー・会話分析について、概説書（前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編『ワードマップ エスノメソドロジー』新曜社）の一部の輪読を行った。執筆には加わっていないが、最初の2日間は、大学院人間文化研究科助教の鶴田幸恵氏に同席してもらい、有益なコメントをたくさん頂いた。記して感謝したい。ついで、班別に分かれて、じっさいのビデオデータを用いながらの作業してもらった。この作業を年末年始に行ってもらい、2月のゼミでは主としてその発表してもらった。ゼミ討論を踏まえたレポートを、2月末日締め切りで提出してもらい、最後の微調整は、TA（ティーチング・アシスタント）の座主・桜井両氏の支援によってなされた。この様式が整えられたファイルを、徳島大学で印刷してくれたのは、授業支援者の中恵 真理子氏と榎田研究室の研究室員の宮本有美氏である。こうやって、多くの人の助力によって、本冊子は作り上げられている。支援して頂いたすべての関係者に御礼を申し上げたい。なお、諸事情から、班活動への参加が困難と思われた院生については、個人的作品を作成してもらい、それを掲載した（その成果が、4章と5章である）。

今回は予定されている3年連続の関わりの初年度であり、研究論文を作成することまでは、ゼミの目標とはなっていなかった。にもかかわらず、各ゼミ生の学習意欲はたいへんに高く（もちろん、能力も高く）、ほとんど研究論文として通用する水準のものが多く提出されてきている。授業担当者としてはこの結果に、驚いている。それぞれの提出物の学問的価値の最終判断は、読者に任せたいが、榎田の評価に根拠があることだけは示しておきたい。前半の3論文について、以下の紙幅でコメントしておくことにしよう。

まず、第一論文について。ALS患者と看護学生とのコミュニケーションに関して書かれたこの第一論文「笑いによる会話の協同的達成－在宅ALS患者と看護学生のやりとりから－」は、コミュニケーションというものがいかに相互行為的達成であるのか、をあきらかにしている。的確なタイミングで発話ができない（可能性がある）ALS患者であっても、

その能力上の問題を会話上のトラブルとしないテクニックの行使が可能である。けれども、このテクニックの行使が可能であるのは、そのようなテクニックの行使を可能にしている聞き手の看護学生の協調的な振るまいによってである（7ページ）。この複雑な相互行為の様相がデータに基づいて明らかになっており、秀逸な分析になっているといえよう。ALS患者のコミュニケーション研究にあたらしい展望を開くものであるとも評価されてよいだろう。

ついで、第二論文「写真鑑賞の相互行為分析」について。この論文も相互行為の研究として秀れている。夫婦がそれぞれ奈良の歴史写真にかんして違った役割分担をしながら、たんなる役割分担に留まらない協調的な振る舞いをしている。その繊細さがビデオに活写されており、感心した。

さいごに、第3論文「鍼灸臨床における医療面接のエスノメソドロジー」について。日本での鍼灸臨床のエスノメソドロジー研究は、いまだ始まったばかりであるが、本論文はその草創期の論文として今後長く参照され続けることになるだろう。代替医療、東洋医学についてのエスノメソドロジー研究としても、モデル的価値があるものになっている。

なお、本研究論文集の主要部（著者本人の希望により、米満論文は除かれた）は、徳島大学榎田研究室のサイト（<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>）にPDF形式で掲載され公開される予定となっている。費用の関係から、部数を十分作成することができなかったが、ファイルは随時ダウンロードできるようにして置くつもりなので、どうぞ自由に活用して頂きたい。また、間違いに気づいた場合には、榎田（kashida.yoshio@nifty.ne.jp）まで、ご連絡頂ければ幸いである。